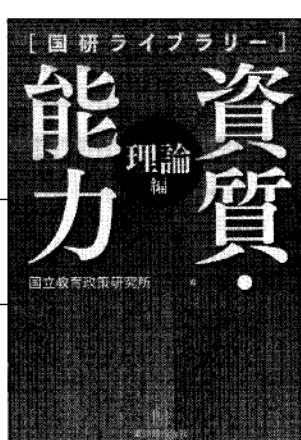


本書は、次期学習指導要領改訂に向けた議論の参考に供されることになつてゐる。本書の背景には、「誰もがわからぬ正解」が示されている。本書の背景には、「誰もが少しづつ考えや知恵を持ち寄つて、答えを作り出していく世界で、みんなが少しづつ現実に適用した結果も見守りながら、より良い答えを求める」という、「持続可能な社会」に向けた時代認識がある。大人も子供も一人一人が自分なりの考え方を持つて、人と対話し、協働しながら、新しい考え方を創造する力が必要なのだ。

本書は、教科・道徳・特活、体育の「分業モデル」を超えた「知・徳・体」や、「まずは知識を得」といった「分離・段階モデル」を超えた「学力三要素」などを一体化する授業デザインを提案する。また、「社会化と個性的発達と学問の系統性」という三つの概念を用いて、授業の構成要素を整理する。この構造は、授業の目標を明確に定め、その達成度を評価するための指標となる。また、授業の実践的な侧面では、教材の選択や授業時間の割り当てなど、具体的な実施方針について述べられている。



国立教育政策研究所 編
2160円 東洋館出版社
☎03-3823-9205

資質・能力[理論編]
「知」「徳」「体」を一体化させる授業とは?

この書籍は、教育理念に基づく目標の融合など、たとえアクティブラーニングにおいても、目標、内容、方法、評価という教育の根本を貫くための理論が示されている。評者は、社会的協働を念頭に入れない競争主義に偏った過去の能力主義教育と、その批判の繰り返しは不毛であったと考えている。その意味で、個人の充実とともに、家庭、職業、地域、生活を通して社会形成者としても充実した人生を送るために必要な力を、達成目標として理論化しようとする。本書の存在価値は大きい。ただし、変化しようとしないのは必ずしも悪いものではないのか。青少年一人一人が、個を社会に生かして、充実した生涯を送るための能力構造に焦点化した議論を望みたい。

（聖徳大学教授・西村美東士）

「資質」を、本書では「能力」とつねにセットで扱っている点については、個人的には気になる。資質は良くも悪くも、その人らしさそのものではないのか。青年の能力構造に焦点化した議論を望みたい。